栞集を読む

松岡　隆子

水温むアコーディオンを弾くやうに　平沢千恵子

暖かな日差しが池にゆきわたり漣がキラキラと煌めく。ひと吹きの風に漣がひろがる。静かに春が動き出した。温み初めた水が春を奏でている。いま平沢さんは池畔に佇み全身で春を感じている。水は確かに温んでいることを感じている。アコーディオンの蛇腹がゆっくりと伸ばされるように、ぶおーんと野太い音が拡がるように。感性で掴んだ独創的な比喩が活きている。

汝も吾も棲んで今生寒鴉　菊池　京子

「汝、寒鴉よ、風が冷たかろう、日暮は寂しかろう。でも生きていればこそ今がある。共にこの世に棲んで生き続けよう」。菊池さんの呟きが聞こえる。菊池さんはいま入院加療中で、命の重さを実感されている。同時作の〈いのちとはやじろべゑめく春隣〉の〈春隣〉の明るさは嬉しい。

「もう春です。快方に向かっておられることと思います。お目にかかれる日を心待ちにしています」。この稿を書き終えたら便りを書こうと思う。

高層の下層中層おぼろなる　梶浦　道成

最近は首都圏に限らず高層ビルの進出が著しい。郊外の空き地は見る見る高層マンションにとって代わられる。何処の駅前も50階、60階建ての超高層マンションが建ち、億ションと言われる最上階は羨望の的となる。掲句の景は事実だと思うが、億ションの高層の辺りは朧も遠慮があるのかもしれない。上五から中七の畳みかけるような表現のリズム感に目線が動く。朧を詠んで斬新である。

二年目を咲いて褒められシクラメン　奥山　瑠美

シクラメンを長く上手に咲かせるのは意外に難しい。水遣りを怠ると萎れてしまうし、遣りすぎても駄目にしてしまう。水の量や頻度も鉢の大きさによっても違うらしく、咲き具合を見ながら細やかに対応してゆくことが必要なようだ。上手に育てれば次の年も咲かせることができる。奥村さんのシクラメンは二年目も咲いた。よく咲いてくれたシクラメンも、上手に咲かせた奥村さんも、共に褒められている。

波音も届きて安房の金盞花　橋本　素子